

ビンナガ 北大西洋

Albacore, *Thunnus alalunga*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

最近一年間の動き

2012 年 10 月に ICCAT 科学委員会 (SCRS) が開催され各国から 2011 年の漁獲量が報告された。2011 年各国の竿釣り、ひき縄及びはえ縄の漁獲量は減少したが、他の漁業による漁獲が増えたため、2011 年の総漁獲量は前年と同程度の 2.0 万トンとなった。

生物学的特性

- 寿命：10 歳以上
- 成熟開始年齢：5 歳頃
- 産卵場：西部では北緯 25 ～ 30 度で、中部から東部では北緯 10 ～ 20 度
- 索餌場：温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

利用・用途

刺身や缶詰原料

漁業の特徴

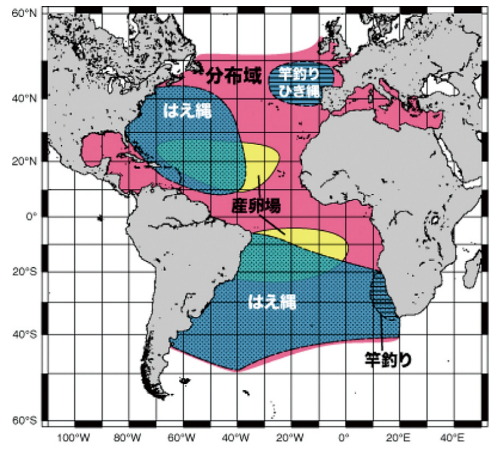
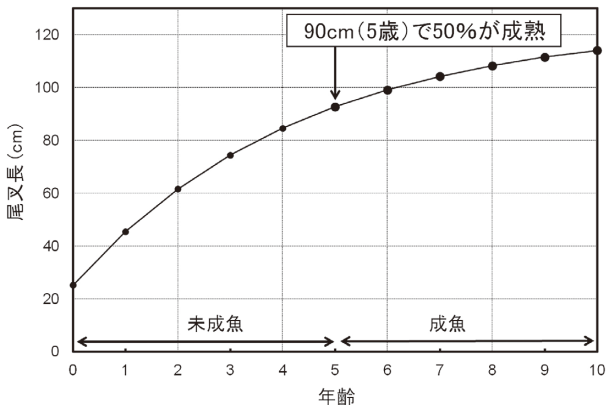
北大西洋のビンナガは、ビスケー湾周辺の海域でスペインのひき縄及び竿釣り、またアゾレス海域でスペイン及びポルトガルの竿釣り、古くから漁獲されてきた。1980 年代後半から、新しい漁業として、流し網や中層トロールによっても漁獲されるようになった。はえ縄による漁獲の総漁獲量に占める割合はあまり小さくなく、台湾が主に漁獲している。

漁業資源の動向

本資源の年間総漁獲量は 1960 年代中頃 (約 6 万トン) がピークで、徐々に減少した。その原因は主にひき縄、竿釣り及びはえ縄などの伝統的な漁法の努力量の減少である。総漁獲量は 1999 ～ 2002 年にかけてかなり減少し 2.3 万トンまで減少した。その後、表層漁業による漁獲量が増加して、総漁獲量は 2006 年に 3.7 万トンにまで回復した。しかし、2007 年から表層漁業及びはえ縄の両方の漁獲量が大きく減少し、2009 年には 1.5 万トンとなった。これは 1950 年以降最低である。2010 年には竿釣り、ひき縄及びはえ縄による漁獲の増加によりやや回復し、2.0 万トンとなった。2011 年の漁獲量は竿釣り、ひき縄及びはえ縄の漁獲量は減少したが、その他の漁業 (中層トロール) による漁獲が好調であったため、2010 年と同程度の 2.0 万トンとなった。

資源状態

2009 年に実施された最新の資源評価では、親魚資源量は 1960 年代以降 MSY レベルを下回っており、現状では MSY レベルのおよそ 68% であった。漁獲率は近年 MSY レベルを上回っており、現状では MSY レベルの 105% であった。将来の漁獲量を一定とした将来予測を行ったところ、2.8 万トンを超える漁獲を続けると資源は回復しないと推定された。



管理方針

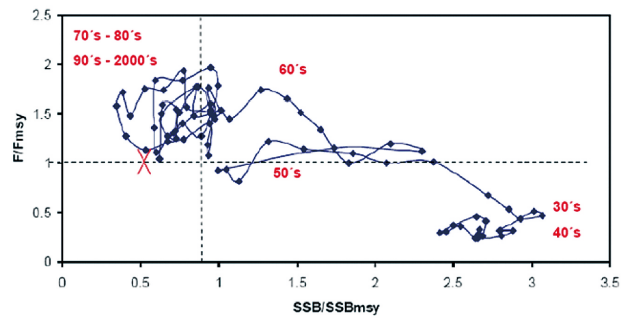
1999 年から漁獲能力を抑えるために、入漁隻数を制限しているほか、TAC も設定されており、2012 年及び 2013 年の漁獲に対する TAC は 28 万トンとされた。また日本については、ビンナガを目的とした操業を行なっていないので、漁獲量が北大西洋全体におけるはえ縄によるメバチの漁獲量の 4% 以下になるよう努力するという規制が課せられている。

資源評価まとめ

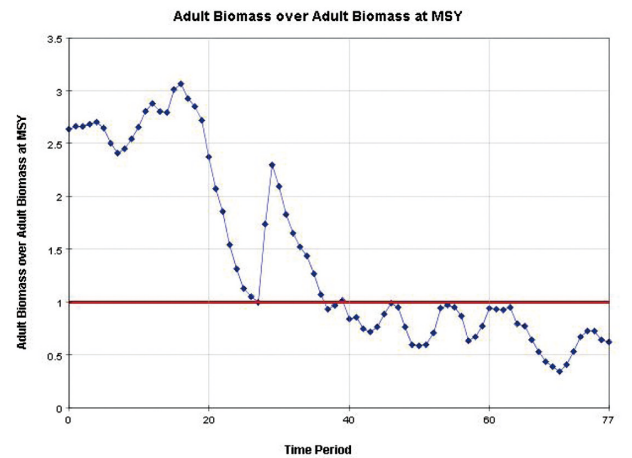
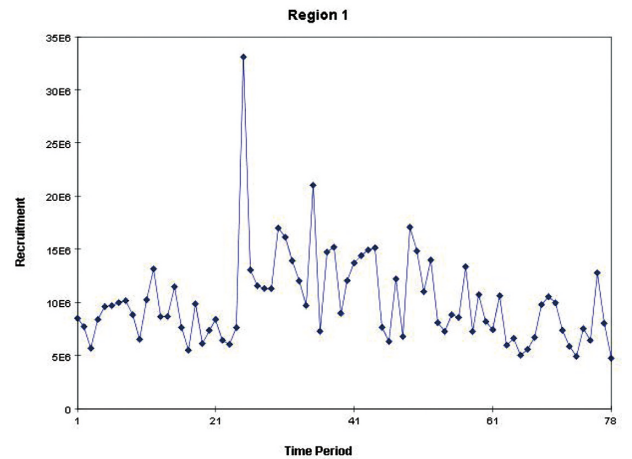
- 2007 年の親魚資源量は MSY を与えるレベルを 32% 下回っていた。
- 2007 年の漁獲係数 MSY を与えるレベルを 5% 上回っていた。

資源管理方針まとめ

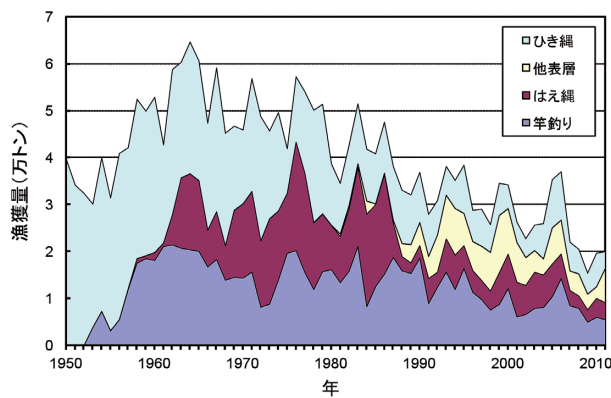
- 2012～2013 年の TAC を 28 万トンとし、国別クォータを設定。
- 漁獲能力（隻数）の制限。
- 日本にはビンナガの漁獲量を北大西洋全体のはえ縄によるメバチ漁獲量の 4% 以下とする努力義務。



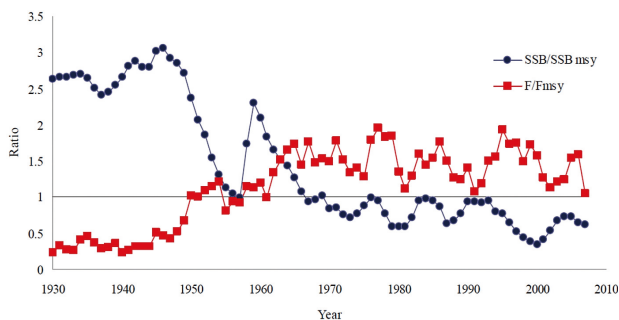
資源状態を表す SSB/SSB_{MSY} と F/F_{MSY} との間の位置関係（1930～2007 年）



Multifan-CL モデルから得られた北大西洋ビンナガの 1930～2007 年の加入量（1 歳魚）（上）及び親魚資源量（下）



北大西洋ビンナガの漁法別漁獲量



北大西洋ビンナガの MSY を基準とした相対親魚資源量 (SSB/SSB_{MSY}) 及び相対漁獲係数 (F/F_{MSY})

ビンナガ（北大西洋）の資源の現況（要約表）	
資源水準	低位
資源動向	増加
世界の漁獲量（最近 5 年間）	1.5～2.2 万トン 平均 1.9 万トン (2007～2011 年)
我が国の漁獲量（最近 5 年間）	288～525 トン 平均 400 トン (2007～2011 年)